浜本純逸著
『文学を学ぶ　文学で学ぶ』

近年の文学教育研究は、読者論という理論を探り当て、その追求と深化が主要な軸のひとつとなって進展していると同時に、それがどのように実践の場でいかされていくのか、ということも常に問いかけられているのではないか。

本書は、浜本氏が「先行研究に学びつつ教育実践の現場と対話するつもりで書いてきた論考群」（まえがき」より）であり、その問いかけに答えるものであろう。内容としては、読者論導入以前の一九七三年から現在に至るまでの氏の文学教育に関わる論考であるが、氏の文学教育への試みは、常に読者論的な立場で貫かれているといえよう。

第一章「文学教育の内容と位置」では、「感動を伴わない文学作品との出会いは、『正確に読めた』とはいえないであろう。」（十八頁）と、読者の感動体験を、文学教育の中心に置く理論を展開している。

第二、三、四章は、それぞれ、文学教育における教材論、教材研究、指導法についての記述である。

随所で実際に教材を取り上げ、分析し、教材化していくなかで、氏の主張が明確に示されている。また、例えば「AがXに出会ってYのときBする」（百二十四頁）といった「物語の構造モデル」を仮説的に提示するという様に、教材分析の定式化が図られている。（このばあいでは、登場人物の変容に着目した教材分析をうまく行うための方法であろう。）これらの点が、本書を、ほんとうに現場において役立つ本にしている、ということを感じさせられた。

（A5判　二二八ページ　一九九六年八月　東洋館出版社　二五〇〇円）

（鎌田　高明）